

ちょっと ブレイク しませんか？

第25回 アラビアのロレンス [1962年 英国]



イソップ寓話集に「アラブ人と駱駝(らくだ)」と題する小話がある。

アラブ人が駱駝に荷物を積んで、上り坂と下り坂のどちらが好きか、と尋ねたところ、閃(ひら)めきのある駱駝が言うには、「平らな道は塞がっているのですか」

1963年のオスカーを総なめにした名作「アラビアのロレンス」、実在のイギリス陸軍将校のトマス・エドワード・ロレンスが率いた、オスマン帝国からのアラブ独立闘争(アラブ反乱)を描いた歴史映画である。延々と続く広大な白い砂漠と地平線を背景にロレンスが跨った駱駝が駆ける場面等一度は見ておきたい作品だ。BGMが素晴らしく、同時に焼け付くような砂漠の場面でやけに喉が渇く。21世紀になっても戦火の絶えないイラク、ヨルダン、シリアなどが舞台だ。

1916年、英国陸軍カイロ司令部勤務のロレンス少尉は、特命を受ける。現在トルコに対して反乱を起しつつあるアラブ民族の偵察だった。早速ロレンスは灼熱の砂漠の中を反乱軍の指揮者フェイサル王子の陣営近くで英軍連絡将校ブライトン大佐に逢った。そこでロレンスは近代武力の前に暴露されたアラブ反乱軍の無力さをまざまざと見せつけられた。ブライトン大佐は英軍による指導と訓練を提案したが、ロレンスはゲリラ戦を主張。つまり、トルコ軍の重要地点アカバの反対側にいるアウダを首長とするハウエイタット族と手を結び、背後から敵連絡網などを叩いて攪乱させるという作戦だった。アカバでの戦いは熾烈を極めた。全てが焼き尽され、トルコ兵の姿はなかった。

ロレンスはアカバ攻略を告げるためカイロに向った。カイロに着くと司令官が変りアレンビー将軍になっていた。ロレンスはゲリラ戦の指導者の任務を与えられ、エルサレムに行ったものの、既に英仏両国間にアラブとトルコの土地を二等分する条約が結ばれているのを知り愕然とした。ロレンスのゲリラ部隊は再編成された。部隊がロレンス支持者の集落へ来たとき、すでに集落はトルコ軍の襲撃を受け眼前に悲惨な光景が待っていた。怒ったロレンスはトルコ兵を最後の一人までも追って殺害した。種族間の争いが起り、アウダは部下を連れ砂漠へ帰った。その時ロレンスはトルコの病院に忘れられている二百人の重傷者のことに心がおよんだ。彼はアラビア人の服をまとうと病院へ向った。だが、服装で誤解した英国の軍医に、彼こそこの惨状を引き起したアラビア人の張本人だと平手打ちを食わされた。アレンビー将軍やシリアの王となるフェイサルにとって、ロレンスはお荷物と見なされた。結局ロレンスへの論功行賞は、大佐への進級と、英国への帰還船に個室が用意されただけ。軍用車でダマスカスを発ったロレンスは、窓外に顔なじみを探したが、誰一人として彼に気づく者はいなかった。ロレンスを覚えているのは荒漠たる砂漠だけかも知れなかった。

「火中の栗を拾う」という諺の意味は、意気に感じて困難な道を選んでも、損な人生に終わることをいう。荷物を背負った駱駝にとっては上り坂も下り坂もしんどい話だ。駱駝はやはり砂漠が似合う。ところでグローバルゼーションは、否応なく国際競争を要請し、余儀ない困難な道の選択で技術革新と市場拡大も進んでいる。一方で、平坦な道を選ぶ人の気持ちも分からないと、永久に欧米には追いつけないという穿った見方もある。



映画評論家・精神科医

かゆ かわ ゆう へい
粥川 裕平

岡田クリニック院長
名古屋工業大学 名誉教授